

「かわらけ」考

伊野近富

1. はじめに

「かわらけ」とは、基本的には素焼きの皿形の土器のことを言い、考古学上は通常土師器皿と呼称している。もっとも簡便に作られた土器であるためか、注目されることはあまりなく、研究分野としては遅れていた。しかし、近年中・近世の遺跡を発掘する機会が多くなるに従い、出土量も飛躍的に増え、また、各時代とも普遍的に出土することから、これを遺構の年代を決める重要な手懸りとする動きが京都で興った。すなわち、1978年の同志社報告に始まった、各調査機関による一連の編年作業である。

この作業によって、一応平安時代から江戸時代の土師器皿は、30～40年単位で分けることができた。この成果を受けて、特にこれを生産する集団について考察したのが本文である。

土師器皿の用途は多岐にわたり、みそやおかずを入れたり、御飯を盛ったり、灯明に使ったりしている。遍く使用されたので、その推移を見てみると、需要する側と供給する側双方の思惑が入り混じり複雑さを増している。しかし、大雑把に言えば、小さな画期は供給側の意図を反映し、大きな画期は需要側の強い意図を反映しているように見える。この視点が正しいかどうかは、自ら明らかとなってゆくだろう。

さて、土器づくり集団の問題を考える場合重要なことは、この集団は粘土を採掘し、薪を伐採し、製作地に運んで、そこで成形し、焼いた後、出荷するという作業を遂行しているが、基本的には、粘土や薪を取る土地は所有していないということである。つまり、律令体制なり、後の荘園領主や在地領主などの権力の保護がなければ、自由に土器づくりが行えない技術者集団だったのである。このことに留意し、以下考えてみたい。

本文では、まず土師器皿をいくつかの集団を予想して分類し、次にそれぞれの集団の変遷を辿りたい。その後、なぜ変遷したのかを考えてゆきたい。なお、今回は平安京(京都)で出土するものに限って考究する。

2. 土師器皿の編年と分類

ここで使用する資料は、1980年に報告した平安京左京内膳町跡のものである。年代決定

の根拠については、同報告を参照して載きたいが、一部改定する必要も感じている。これについては他日を期すこととしたい。以下の分類については、横田洋三^(注5)氏の案を加味し、若干改変している(第1図)。

分類

分類する際注意したのは、第1に形態、第2に色調である。形態差は製作技術系統の差を示し、色調差は、粘土採取地の差を示している。普通、土師器皿のように簡便なものは製作地と粘土採取地とは、そう遠く離れていないと思われる。したがって、色調差は生産地の差を示していることになる。なお、資料の制約上、10～18世紀のものに限って分類した。

Aタイプ(褐色系) 手づくねで成形。基本的には大・小の2規格。口縁部が外反するものをAa, 内反するものをAb, 直線的なものをAcとする。(内膳町跡SK19段階から同SE372段階まで)

Bタイプ 「て」の字口縁^(注6)と言われるもので、褐色系と乳白色系の2種がある。但し内膳町跡SD41A段階以降は、褐色系が多くなり、また規格も大・中・小から大・小の2種になる。(内膳町跡SK19段階から同SE288下層段階まで)

Cタイプ 口縁端部を内側に折り曲げた扁平な皿である。色調はいろいろある。

Dタイプ 京都近郊以外で製作された異系統の皿である。口縁部を一回のみ挟るように横ナデを施す。金色に光る雲母が顕著に認められる。

Eタイプ(褐色系) 深形。Acタイプから派生したものか。大・小の2規格がある。

Fタイプ 糸切り底の皿。

Gタイプ(白色系) 深形。型づくり的な成形法^(注7)を用いる。突出のない皿をGa, 突出のある皿(へそ皿)をGbとする。なお、Gaの内ではやや厚手のものをGa-1とし、口縁部がやや外反し、薄手のものをGa-2とする。(内膳町跡SE326段階から同SE372段階まで)

Hタイプ 内外面をロクロナデし、底部が糸切りのもの。

Iタイプ(淡褐色系) 浅形。型づくり的な成形法^(注8)を用いる。このタイプの出現直後は、褐色系と白色系の2種が混在するが、内膳町跡SK142段階以降は、淡褐色系が主流となる。内底面端にやや窪んだ圏線がないのをIaとし、あるのをIbとする。そして、鋭く窪んだ圏線があるのをIcとする。大・中・小の3規格がある。

以上、胎土の色調や成形技法及び形態差によって9タイプに分類した。出土量から言えば、AタイプとIタイプが平安時代から江戸時代までの主流となる皿であって、他はそれを補完する量となっている。それでは、主流であるA・Iタイプと、特色のあるB・Gタイプの4タイプに焦点を当てて、以下述べてゆきたい。後に述べるが、土器づくりは一人で

するものではなく、少なくとも二人以上の共同作業によって成立しており、これらのタイプを製作した人々も、ある程度の集団を形成していたといえる。

土器づくり集団

Aタイプの集団

遅くとも10世紀後半に活動を始め、14世紀まで継続している^(注9)、京都近郊では最大の土器づくり集団である。口縁部が外反するAaタイプは、10～11世紀に盛行し、次第に口縁部が内反するAbタイプに移行する。12世紀初め頃にはAbになり、同中葉まで盛行する。この変化は、口縁に施される二段のナデが、強い力で行なわれていたものが、徐々に弱くなっていくことと対応する。つまり、外に反らせるという工程を減らしたことに他ならない。ついで内に反らすという工程をも放棄し、口縁部が直線的になるAcに移行する。12世紀後葉には未だ二段ナデを踏襲するが、同末葉頃には一段ナデになってしまう。このように、Aタイプの集団はひたすら工程の省略化を目指していたことがわかる。そして、口径も縮小する。中型の皿(以下中皿)の平均的な口径は、11世紀の中頃で14.2cm、小型の皿(以下小皿)で11cmであるのに対し、14世紀末になると、中皿が10～11cm、小皿が7～8cmとなる。

以上のことから、Aタイプの集団は、古代都市から中世都市に変貌を遂げた京都の需要層の要求に応え、大量生産を目指したといえる。この集団はAcタイプで成形法の完成を遂げており、13世紀には安定した生産体制をとっていた。ところが、14世紀になると法量にばらつきがみられ、しかも歪んだものが多くなるなど、不安定な生産体制と共に、崩壊寸前の土器づくり集団を見ることができる。

Bタイプの集団

10世紀から12世紀初めにかけて活動した集団である。胎土の色調からすると、10世紀から11世紀前葉まで乳白色系でほぼ統一されており、生産地は一カ所と推定できる。しかし、その後は褐色系もあることから、特異な形態(口縁端部を内側に折り曲げた形態)を真似て、あるいはAタイプの集団も製作していた可能性がある。薄手から厚手に変化するが、法量はほとんど変化せず、大量生産を要求されなかった皿である。このタイプの皿には朱を塗ったものもあることから、非日常容器として専ら使用されていたかも知れない。

Gタイプの集団

13世紀後半から14世紀末頃まで活動した集団である。まず、厚手で底面に突出のない皿Ga-1を生産し始め、14世紀になって突出のある皿Gbを生産するようになる。Ga-1は鎌倉^(注10)でも出土し、白かわらけと呼ばれている。すべてが京都産とは言えないようであるが、それでも、Gタイプの集団に粘土や成形法を伝授された場合しか想定できないので、この

集団と鎌倉の強い結びつきが注目される。なお、成形方法としては、川越俊一・井上和人
 両氏が明らかとした瓦器碗の場合と同様に、内型を使った成形であると横田洋三氏は指摘
 している。^(注11) Gタイプの皿は厚手から薄手への変化はあるが、法量はほぼ一定している。こ
 の現象はAタイプの需要層とは、必ずしも一致しないことを示唆している。Ga-1が鎌倉
 で、Gbが広島県草戸千軒町遺跡^(注13)でそれぞれ出土していることは、これを証明している。
 Gタイプは、法量の異なる様々な地の需要層に対応するため、法量を一定としたのである。

Iタイプの集団

15世紀から18世紀までは活動した集団である。Aタイプの集団が崩壊した後、京都近郊
 で最大の生産者集団となった。15世紀前半のそれは、AタイプとGaタイプがミックスし
 たような形をしており、色調も赤みがかった。定形化した浅形となるのは15世紀後半
 になってからで、色調も褐色系ではほぼ統一される。法量は当初大きくなるが、徐々に縮小
 してゆき、16世紀後葉にまた一旦大きくなり、その後変化しない。平均的な口径は、大皿
 で16cm、小皿で10cmであったものが、16世紀中葉になると、大皿が12cm、小皿が9cm
 となる。それが、同後葉になると、大皿が13cm、小皿が9cmに統一される。

法量が縮小することは、供給側の意図が明らかで、したたかな生産者の姿を窺うことが
 できる。しかし、それが16世紀後葉になって、法量が大きくなるということは、需要側の
 強い意図がその時反映されたとみる以外にない。そして、その後も法量が一定しているこ
 とは、強い意図が一般購買層ではなく、支配者から発せられたとみることも十分可能であ
 る。これについては、後で詳しく述べることにする。

3. 文献に見える土器づくり集団

前章で抽出した土器づくり集団が、どこで生産していたのかを明らかにするためには、
 いくつかの方法があるが、ここでは文献を使うことにする。

Aタイプの集団が、安定した供給体制をとっていた、12・13世紀に焦点を当ててみよう。

摂関家である藤原忠実家の一年の行事を記録した『執政所抄』(1118～1121年にかけて
 の記録)^(注14)によれば、12世紀初頭には、「栗栖野」「深草」「楠葉御牧」という生産地のあった
 ことがわかる。「栗栖野」は、平安京の北にある、現在の京都市左京区岩倉幡枝付近と思
 われる。この地は、古代の主要な瓦生産地でもあった。「深草」は、平安京の東南にある、
 現在の京都市伏見区深草付近と思われる。「楠葉御牧」は、平安京の西南にある、現在の
 大阪府枚方市楠葉付近と思われる。当時は河内国であった。

「深草」は、有名な生産地であつたらしく、建保二年(1214)に作成されたといわれる
 『東北院職人歌合』には、

ひとめみし かはらけいろの きぬかつぎ 我にちぎりや 深草の里
とあり、かわらけと深草というイメージができて上がっている。

また、『醍醐雜事記』巻第九の「醍醐寺座主御拜堂日記」〔治承三年(1179)〕によれば、銅工や壁瓦工などと並んで深草とあり、土器づくり(集団)の代名詞として使われている。

「楠葉御牧」は、『執政所抄』や『類聚雜要抄』によれば、深草と並んで一大供給地となっていた。後文献の「供御御園固」には、

土器・尻取三十六口、^(注15)大土器三十口、小土器三百三十六口

已上楠葉御園作手所進

とあり、多量の土器を供給している。また、

黒器、期日前有日数之時、下知楠葉御牧

とあり、黒器を生産していたことが知られる。12世紀の黒器とは瓦器に他ならず、考古学からも、瓦器の一大生産地である楠葉東遺跡の存在が知られている。^(注15)

「栗栖野」は、他の二大生産地とは違い、それほど生産量は多くなかったようである。^(注16)しかも、深草とは明確な器種の差、及び使用階層の差が認められる。すなわち、主たる製品は「様器」^(注17)であり、高坏である。深草が盤・高坏・鉢・坏を主体としているのとは差異がある。また、使用階層は前者が殿上人であるのに対し、後者は諸大夫であることから、生産量とは別に、階層の差によって土器使用が限定されていたことがわかる。

以上の結果、考古学見地から分類したAタイプの集団が「深草」の地で活動していたことは疑いない。そして、出土量は少ないが、特殊な器形であることを重視すれば、Bタイプの集団が「栗栖野」の地で活動していた可能性は十分にある。^(注18)「楠葉御牧」については、平安京では異質なDタイプの皿が、生産地としてあげられるのではなかろうか。

次に、14世紀に焦点を当ててみよう。応永年間(1394～1428)に成立した『庭訓往来』には、京都の特産物として「嵯峨土器」があげられている。「嵯峨」は、現在の京都市右京区嵯峨野付近と思われる。島田貞彦氏^(注19)や中ノ堂一信氏^(注20)によると、この嵯峨では当初樞木権大夫、藤本佐大夫の両家が、世々野々宮神社の神職をなし、その傍ら土器を製作していたという。やがて、分家六軒が加わり、以来土器づくりの里を八軒と称するようになったという。この土器は、特産物として売られていることから、余程特徴的な土器と思われる。14世紀に於いては、白色系で美しいGタイプしか該当するものは見当たらない。

次に、15～18世紀に焦点を当ててみよう。前述した「嵯峨」の土器づくりは、応仁年間(1467～69)頃には、嵯峨の村より18軒の土器づくりたちが幡枝(現、左京区岩倉幡枝付近)に移住している。木野に残る『愛宕社文書』^(注21)は、この間の事情を、

(嵯峨村は)土悪敷御座候て、土器御用に立申さず故、土能き所を見立て候様に仰付な

され、則ち幡枝村に七十間四方の領地仰付(以下省略)と記している。この集団は、元亀三年(1572)に東幡枝とも呼ばれた木野の地に更に移住した。そして、江戸時代になると毎年1月5日と8月1日には烏帽子・素襖を着して、土器を禁裏及び仙洞に献上している(『日次紀事』)。

以上の結果、Iタイプの集団が、「幡枝(木野も含む)」であることは疑いない。

これらの考察によって、Aタイプの集団が「深草」、Bタイプの集団が「栗栖野」、Dタイプの集団が「楠葉御牧」、Gタイプの集団が「嵯峨」、Iタイプの集団が「幡枝」にそれぞれ対応することがわかった。それでは、これらの集団が成長したり、没落したりする様子を眺めながら、土器づくり集団の本質を明らかにしたい。

4. 土器づくり集団の変遷

ここまで漠然と土器づくり集団と言ってきたが、その内実とはどのようなものであったのだろうか。まず、奈良時代の史料である浄清所解(『大日本古文書』3-412, 11-350)によると、

浄清所解 申作土器事 合式人 単功壹伯柒拾捌人

讃岐石前相作堀土運打薪採藁備井進京 単功八十九人

借馬秋逢女作手 単功八十九人

田坏二千四百口 功廿四人々別日百口 「十口充(異筆, 下同じ)錢三文」

甕形九百九十口 功卅三人々別日卅口 「十口充八文」

片碗三百六十口 功 九人々別日卅口 「十口充五文」

片佐良六百六十口 功廿二人々別日卅口 「十口充八文」

小手洗六口 功 一人 「一口充六文」

惣作器肆仟肆伯拾陸口

とある〔天平勝宝二年(750)七月頃の記事〕。

これは、男女一組の土器づくりの3カ月にわたる生産活動を記したものである。これによると、男性が粘土を採掘して運び、薪を採集し藁を備え、そして、完成した土器を京に運んでおり、女性は土器成形に専念している。この作業によって、彼らは浄清所から賃金の支払いを受けている。ともかく、最低限二人が従事したことがわかる。江戸中期の「幡枝」の場合(『京都御役所向大概覚書』)でも、家数40軒、100名の村人が従事していたことが知られ、土師器生産は2～3人の基礎的な単位(以下基礎単位と呼ぶ)の協業作業であったことがわかる。基礎単位が集合して集団が形成されるが、現象面での集団の消長は、基礎単位数の増減と、集団内部に於ける基礎単位間の結束度の強弱に他ならない。

さて、人口十万とも二十万とも言われる平城京の出現は、一大消費地の出現と言え、更

に人々の出入りの激しい都市であることとも作用し、土器の需要は飛躍的に高くなった。

土器づくり集団は、このような事態に対処するために、土器づくりの手順の省略と法量の縮小化を指向した。田中琢氏^(注23)によると、坏の場合8世紀初めは5技法11手順、同後半は3技法4手順、9世紀初めには3技法3手順となったという。平城京で出土する土師器のほとんどは、胎土や調整手法によって2大別できるが^(注24)、法量は統一されている。畿内各地で発見される土師器にも規格性があり、律令国家の規制の一端をみることができる。しかし、法量の縮小化を黙認したことは、反面規制が弛緩しつつあったことを暗示させている。

土器を多量に使う祭祀の盛行や、長岡京・平安京の造営に対して、手順の省略と法量の縮小化に対応した土器づくり集団も9世紀末頃に大きな変革を迎える。この頃まで畿内各地はよく似た土器を使用していたが、10世紀になると地域的特色をもった土器に変質してしまうのである。これは、畿内通有の土器を製作していた各地域の集団が、律令体制の規制を離れ、独自の土器を製作するようになったとも言える。荘園制への移行によって、各地の土器づくり集団は薪や粘土の採集を拒絶されたり、荘園内に封じ込められたりして、期せずして独自の道を歩まざるを得なかったのではなかろうか。

さて、平安京に目を戻してみると、第1図^(注25)のように10世紀には法量の縮小化は終わり、大・中・小の3規格の確立をみて、一見安定した供給体制となる。これに呼応してか、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器の出土量も増し、一定の地位を占めるようになる。これは、表面的には律令体制の安定を示しているようだが、実情は、浅香山木氏^(注26)が推定した陶邑のように、須恵器の調納悪化に対処して、主たる需要機関であった大膳職や内膳司が、生産者の直接把握に乗り出したようなことがあったのではないか。そして、土器づくり集団から言えば、変質した律令体制の中での次善の策として、その寄人となり、安定した薪や粘土採集の保証を求める動きがあったのではないか。

多様化した土器に対応して、土師器皿Bが出現する。10～11世紀前半には、Aタイプも含めて、ほとんど法量は一定している。これは、摂関家をはじめとする貴族や一般官人層などの需要者の意志が大きく反映しているのだろう。食器として施釉陶器の碗や皿、黒色土器B類の碗などと並んで土師器皿も重要な位置を占めるが、各地からもたらされるこれらの土器が、セットとして使用されたため、法量の不変が強く要請されたのではないか。

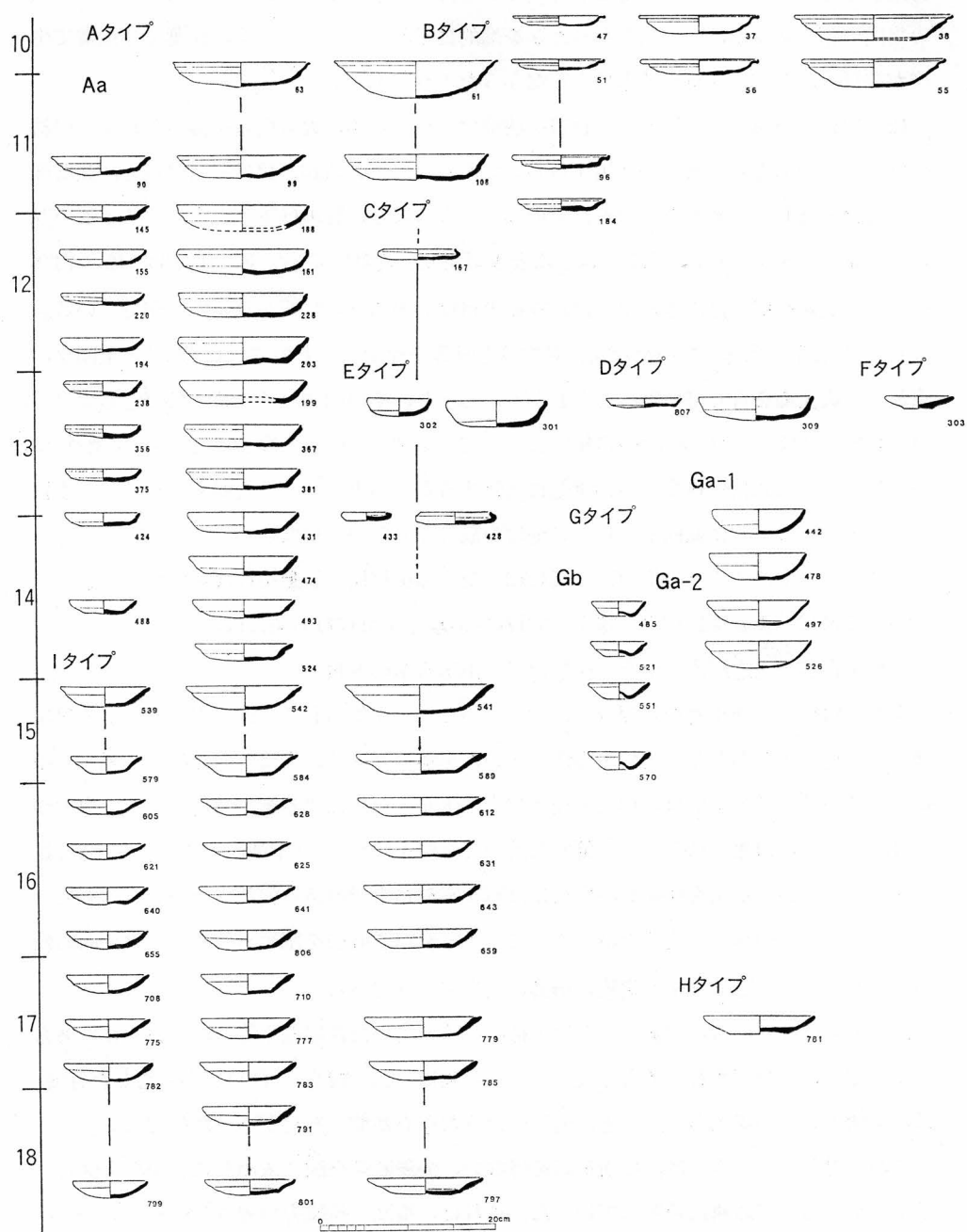
しかし、律令体制はいよいよ変質し、各地で私領主が成長して荘園が増大し、国衙領が現出するに及んで、土器も変革した。平安京の土師器皿Aタイプは、工程の省略と法量の縮小化を指向し、少なくとも14世紀までは継続する。規格も大・小の2種となる。一般庶民の需要度の高まり、仏事や祭礼などによる需要度の高まりなどに対応していく。この間に土器づくり集団の編成が行なわれた。平安京外ではあるが、畿内一円に瓦器碗が成立し、

食器のセットが確立し、また、須恵器では甕・鉢を専焼する神出窯が出現し、貯蔵や調理具に関しても確立する。このような動きは、土器づくり集団とこれを保護する勢力が、はっきりと商品として土器を位置づけた結果といえる。この動きは変質した古代勢力の一部にある程度依存しながらも、中世の開幕をはっきりと告げている。

では、土器づくり集団の実態はどうだったのだろうか。12世紀前半の「深草」(Aタイプ)集団をみると、『執政所抄』では摂関家所属、『類聚雑要抄』では内膳司への貢納例、『醍醐雑事記』では醍醐寺所属例があり、錯綜した支配状態を知ることができる。しかし、同後半になると醍醐寺にほとんど統括されるようである。すなわち、『醍醐雑事記』によれば、座主拝堂の都度、これに参列して饗膳に預る慣例をもっていた「深草」を知ることができる。その人数は、天承二年(1132)と保元元年が2人、応保二年(1162)5人、治承三年(1179)が7人である。もとより、基礎単位の長が代表して参列しているだろうから、人数は基礎単位の数を示しているといえよう。徐々に寺の支配下に入った土器づくりの状態は次の記事で確認できる。巻11所収の「座主房雑事日記」(1161~1179年の間に成立)によれば、これらの土器づくりが、寺領深草四丁町・前滝の名田保有者として出てくる。四丁町の場合は、光里以下6名が、合計すると田が1町7反半、畠が1町4反大を保有し、それぞれが反別四斗代と、名別毎月360重の土器を負担していた。前滝の場合は、是行以下の3名が、それぞれ3反の田を保有し、それぞれ毎年750重の土器を負担していた。いずれも名田の保有規模は小さく、これだけでは到底生活はできなかつただろう。すなわち、生活の主たるものは、土器づくりであって、これを販売することによって生計をたてていたと推定できる。先に分類したAcタイプの確立は、換言すれば大量生産のための土器形態の確立であり、このような条件下で安定した供給体制を確立する。但し、基礎単位は7以上集まり、集団を形成しているが、これらを統轄する長はいなかったようである。

これに対して、「楠葉御牧」の場合は、長がいたようである。『梁塵秘抄』巻二の^(注27)今様には、女性が土器を作っている様の後に、娘をはやしたてて受領の正妻に、と騒いでいる様が歌われている。つまり、受領と縁組みする可能性のできた富豪層としての存在を推定できよう。同時期の和讃である『寺門高僧記』五、禅仁法印権大僧都条によれば、

久須和美末岐乃度岐津久利少^(注28)岐得多利志留志仁波太布流流登古漏爾津地津可牟とあり、ここでも強欲なイメージの富豪層の存在を認めることができる。「楠葉御牧」の土器づくりは、11世紀前半に瓦器碗を製作し始め、12世紀になると大量生産を実施する。これは、摂関家の私牧であった点を抜きにしては語れない。瓦器碗の生産遺跡である楠葉東遺跡は、13世紀前後に廃絶する。宇治田和生氏によれば、建仁三年(1203)四月に春日若宮社に伝領されたことを契機として衰亡すると推定されている。支配勢力の交替が、敏感



第1図 土師器皿分類・編年試案

に土器づくり集団の盛衰に反応するということは、富豪層まで成長した者(長)のあったこの集団の存立基盤が、いかに弱かったかを端的に示している。その後、楠葉では近隣で生産が続行されるが、往時の勢力はもたなかったようである。

12・13世紀を通じて、畿内では食器の法量は縮小するが、大量生産を指向したための結果であり、商品としては十分通用するものであった。ところが、14世紀になると、瓦器碗の高台は消滅し、土師器皿も歪んだものが多くなるなど、質の低下が顕著となる。この間に「深草」(Aタイプ)の集団は、ほとんど専業集団に変身する。元弘三年(1333)に、内蔵寮より建武新政権へ提出された『内蔵寮領等目録』のなかに、「深草瓦気」がでている。これは、京都で活動していた商人に対する課役等を列記したもので、「深草」の集団が、京都での販売権を有していたことがわかる。しかし、その頃には「深草」は衰亡しつつあり、新興の「嵯峨」(Gタイプ)の集団によって、京都第一の座を奪われていく。「深草」は、専業集団として12世紀後半から13世紀に活躍するが、14世紀になると醍醐寺を離れ、土器販売業としての商人に転向し、自らの地盤を危なくしたのではないか。

「嵯峨」の土器づくりの集団は、既に12世紀から小規模な活動を行なっていたらしい。

『長福寺縁起并資財帳』(『平安遺文』3817)の治承元年(1177)の条には、

件菜^(梅津)自当御庄之所出、至手鍋捌拾口者、田堵深草所進也

とあり、田堵深草が土器を長福寺に貢納していたことが知られる。他の記事^(注29)によって田堵深草は、梅津上荘あたりで土器を製作していた可能性が高く、実はこの北隣が「嵯峨」の地なのである。この集団は、13世紀後半に大量生産を可能にする製作技術である、内型づくりを考案し、14世紀になると圧倒的な勢いで生産を始める。『本朝陶器攷證』によれば、嵯峨の小倉山辺の粘土を採掘し、中世には野々宮神社と縁のある朝廷へ土器を貢納していたらしい。この朝廷への土器貢納によって、土器製作や販売を認められていた供御人的性格^(注30)を有していた、という中ノ堂氏の指摘は重視すべきである。

南北朝期は動乱の時代である。かつて権勢を誇っていた荘園領主等は、新興の在地勢力によって土地を分割され、威力を失っていく。畿内の瓦器碗や、「深草」が衰亡した背景は、集団としての組織力の弱さと、前述のような存立基盤^(注31)の変化があったのである。

これに対して「嵯峨」は、技術革新を行ない、流通圏を全国^(注31)に求めたことが功を奏し、動乱の中にあっても急速に勃興していった。これは、集団の組織力の強さの勝利ともいえ、いわゆる「座」を形成していたかも知れない。

15世紀になって室町幕府が安定すると、法量規制が実施されたらしい。ここで一気に土師器皿は大きくなる。「嵯峨」の集団は、粘土の少ない白色系の皿(Gタイプ)を作るのをやめ、豊富な褐色系Iタイプを案出する。しばらくは試行錯誤が続いたようだが、「幡枝」

へ移住し、典型的なⅠタイプを生産する。15世紀後半に褐色系で統一される事実と、応仁年間に、「嵯峨」から「幡枝」に移住したという記事は、よく符合している。

16世紀後葉になると、戦乱は激化し在地の豪族の保護を求めて、河を越えた東側の木野の地に移住する。『山本家文書』〔元亀三年(1572)〕によると、

領地之内きの野芝にて可居住之由得其意候、然者土器土の事、存分次第可取も不可有諸公事者也、仍状如件。

元亀三年十月十八日

山本昌尚

土器衆中

とあり、在地の豪族に粘土や薪の自由採取を保証して貰うため、移住したことがわかる。

ところが、山本氏は天正年間(1573～92)に、織田信長軍によって駆逐されてしまう。15世紀から法量は縮小してきたが、この時また大きくなり、以後統一された。封建体制下の厳しい締めつけによって「幡枝」の集団は、農林業の副業として土器づくりをすることを余儀なくされ、富豪の途を鎖されてしまうのである。

5. おわりに

以上、土器づくり集団の変遷を辿ってみたが、この期間は大別4期に分けることができる。Ⅰ期は8・9世紀で、一定の基礎単位数によって遂行された大量生産期である。律令体制下で畿内一円、同様の規格をもった期間でもある。10世紀の準備期間の後、Ⅱ期は11～14世紀までで、基礎単位数は増加し、いくつか集団を形成し、ある者は富豪層に到達する。しかし、存立基盤が荘園領主等の勢力であったため、南北朝期を境に、新勢力の侵蝕を受けると、急速に衰退した。Ⅲ期は14～16世紀中葉までで、新勢力の保護を受け(室町幕府を含める)、供御人として広範囲に流通圏を広げて活躍した期間。集団は結束度を強め、おそらく「座」を形成していた期間。Ⅳ期は16世紀後葉から18世紀(19世紀もか)までで、封建体制下におかれ、農林業の副業としてあった期間。基礎単位数はもっとも増えるが、商人として活躍する場は失われ、ただ、農民層の需要の高まりに対応しただけの期間。この4期の期間中、土器づくり集団は半専業(8～10世紀)、専業(11～16世紀)、副業(16世紀後葉以降)と変遷したとも把握できるが、これについては今後の課題である。

なお、他地域に於いては法量縮小化がない場合もあり、今回の流れとは別な事情を想定しなければならない。簡単に見通しを述べると、鎌倉の場合は、幕府の規制が土器にまで及んだのであろうし、一乗谷朝倉館^(注32)の場合は、戦国大名である朝倉氏の規制があったのだらう。つまり、法量は各地域によって異なっていたのであり、これが統一されるのは、16世紀の後葉を俟たねばならなかったのである。(伊野近富＝当センター調査課調査員)

- 注1 この他、土師質土器と呼ぶ研究者も多い。また、鎌倉等の研究者は、かわらけと呼ぶ。筆者は、焼成方法を重視し、歴史的に見る場合は中世土師器でも構わないと考えている。
- 注2 鈴木重治・松藤和人『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物』同志社大学校地学術調査委員会 1978
- 注3 主なものを列記すると、a 平良泰久・奥村清一郎・伊野近富他「平安京跡(左京内膳町)昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報1980-3』京都府教育委員会) 1980
b 清水芳裕他『京都大学構内遺跡研究年報』昭和55年度 京都大学埋蔵文化財研究センター、を始めとする、泉 拓良・宇野隆夫・五十川伸矢氏らによる一連の京大報告。c 横田洋三「出土土師皿編年試案」(『平安京跡研究調査報告 第5輯 平安京左京五条三坊十五町』(財)古代学協会) 1982、を始めとする横田氏の一連の報告、などがある。
- 注4 注3のaに同じ
- 注5 横田洋三「土師器皿の分類と編年観」(『平安京跡研究調査報告 第11輯 平安京左京四条三坊十三町』(財)古代学協会) 1984 なお、横田分類案との対応は、伊野Aa(横田A₁)以下同様、Ab(A₂)、Ac(A₃)、B(C)、C(D)、E(B₁か)、F・H(なし)、Ga-1・Gb(B₁)、Ga-2・Gb(B₂)、Ia(B₂)、Ib(B₃・B₄)である。
- 注6 泉 拓良・宇野隆夫「京都大学北部構内BG31区の発掘調査」(『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和54年度 京都大学埋蔵文化財研究センター) 1980
- 注7・注8 注5参照
- 注9 横田氏(注5文献)によると、A₃は15世紀まで存続している。筆者も形態の連続性は認めるが、京都で流通した量は少なく、集団としてはほとんど解体していたと思う。憶測だが15世紀のものは奈良周辺のものに類似しており、奈良火鉢座等とのつながりを求めたい。なお、『山科家礼記』によると、天文元年(1532)に、深草土器600という記事が出てくるが、これはIタイプの中に抽出しにくい「深草」があるのかも知れない。
- 注10 斎木秀雄「かわらけ」(『光明寺裏遺跡』北区鎌倉学園内遺跡調査団) 1980 服部実喜「第Ⅵ章 第2節 中世」(『蔵屋敷遺跡』鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会) 1984 など。
- 注11 川越俊一・井上和人「瓦器腕製作技術の復元」(『考古学雑誌』第67巻第2号) 1981
- 注12 横田洋三「付論 土師器皿(Bタイプ系)の器形、規格の変化と製作技術について」(『平安京跡研究調査報告 第12輯』(財)古代学協会) 1984
- 注13 松下正司・小都 隆編『草戸千軒町遺跡一第18~20次発掘調査概要』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報 1976 など。
- 注14 義江彰夫「摂関家領の相続研究序説」(『史学雑誌』76編4号)
- 注15 宇治田和生「楠葉型瓦器に関する二・三の問題」(『(財)枚方市文化財研究調査会研究紀要第1集』) 1984
- 注16 『執政所抄』
- 注17 『執政所抄』をみる限り上質品である。中ノ堂一信氏は施釉陶器と考えている。a 中ノ堂一信『京都窯芸史』淡交社 1984 また、『玉葉』承安二・一・二条に「五献以前皆様器、今度土器也」とあり、浅香年木氏は、土師器と品質を異にするものと推定している。
b 浅香年木『日本古代手工業史の研究』p.342 法政大学出版社 1971
- 注18 褐色(淡褐色)系は「栗栖野」だが、乳白色系は、あるいは嵯峨野辺りかも知れない。
- 注19 島田貞彦「山城幡枝の土器」(『考古学雑誌』第21巻第3号) 1931
- 注20・注21 注17のa参照
- 注22 20万人説 a 沢田吾一『奈良朝時代民政経済の数的研究』1927 10万人説岸俊男、10万人以下説田中 琢 b 田中 琢(『平城京』古代日本を発掘する3) 岩波書店 1984
- 注23 注22のb参照

- 注24 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所学報第26冊 1981
- 注25 この他に、注3のa所収の図に堀内氏が9・10世紀分をつけ加えたものがある。堀内明博「瓦器成立以後の平安京の土器」（『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会）1985
- 注26 注17のb, p.324
- 注27 「楠葉の御牧の土器造り 土器は造れど娘の貌ぞよき あな美しやな あれを三車の四車の 愛行輦にうち載せて 受領の北の方と言わせばや」泰恒平『梁塵秘抄』NHKブックス 1978による。
- 注28 注15参照
- 注29 「梅津御庄領之新庄田漆町肆段貳百歩，上御庄田壹町肆段大，深草名参段大」
- 注30 注17のa参照
- 注31 鎌倉で出土，注10参照。草戸千軒町で出土，注13参照。
- 注32 服部実喜「鎌倉旧市域出土の中世土師質土器—所謂かわらけの編年を中心に—」（『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会）1985などを参照すると，京都系と在地系があるが，法量はあまり変化しない。前者は，13世紀初頭に「深草」の工人の一部が鎌倉に移住し，生産を開始したとしても，その後新たな工人は来ず，鎌倉を含めた一定の法量の流通圏の中で生産し，13世紀後半に途絶したと考えられる。後者のような一定の流通圏を把握することが，今後の課題であろう。
- 注33 この地の土器の法量が一定であることは，小野正敏・水野和雄両氏より教示を得た。その際小野氏は，貨幣経済の発達による需要者の意識が反映し，供給者もこれに合わせたという経済原理があったのではないかと指摘した。